

(社)日本都市計画学会・中国四国支部

ニュースレター

第28号(H23-1/2011年1月24日)

発行：(社)日本都市計画学会中国四国支部

ホームページ：<http://www.chiikib.co.jp/c-plan/>

事務局：(株)地域計画工房内

電話：082-293-1460

【目次】

		ページ
第2回都市計画研究会	低炭素社会とまちづくりシリーズ / 岩本直也	2
第3回都市計画研究会	低炭素社会とまちづくりシリーズ / 天野耕二	3
都市計画サロン	ヒロシマ・オリンピック / 松波龍一	4
地域活動助成報告	香川県宇多津町見学会 / 佐伯達郎	5
第5回ひろしま自転車トーク	建設コンサルタンツ協会中国支部と共催事業	7
会員活動紹介	地域再生研究会活動報告～米子から / 細田智久彦	9
ホットコーナー	「マニアックまち歩き」 / 吉原俊朗	10
会員紹介	西成典久、目山直樹	11
トピックス	「なかうみワークショップ2010」 / 東大・米子高専	12
トピックス	JR白鳥新駅コンペ選考会報告 / 森田環	13
今後の活動計画		15



第2回都市計画研究会

中四国発・低炭素社会とまちづくり

- 現場に学ぶ技術と暮らし - (シリーズ第3回)

日時：平成22年10月16日(土)14:00~16:00

場所：広島県情報プラザ

主催：社団法人 日本都市計画学会中国・四国支部

参加者：23名

2010年度第2回都市計画研究会が開催された。

今回は、高知県梶原町から岩本直也氏(梶原町環境推進課長)をお迎えし、「梶原町の環境施策と低炭素なまちづくり」と題するご講演を頂いた。



講師の岩本直也氏

梶原町は、2009年1月に政府から「環境モデル都市」に選定された山村型低炭素社会の実現を目指す町である。同町は、高知県の北西部の県境に位置する(面積237km²)。最盛期には町の人口も10,000人を超えていたが、その後の過疎化の進展に伴い、2010年には3,900人まで減少した。現在、NHK大河ドラマ「龍馬伝」の放映もあり、坂本龍馬脱藩のルートとなった梶原町への観光客も多く、龍馬ブームに沸いている。

梶原町では、森と水の文化構想の下に「循環と共生のまちづくり」が取り組まれている。梶原町における様々な環境施策は、「環境モデル都市アクションプラン」の下に推進され、二酸化炭素の排出量の削減については、1990年比で2030年には50%削減、2050年で70%削減という高い目標値が設定されている。アクションプランの全体像は、木質バイオマス地域循環モデル事業プロジェクト、CO₂森林吸収プロジェクト、CO₂削減プロジェクト、人・仕組みづくりプロジェクト、の4つから成る。

梶原町では自然と共生した低炭素社会の実現のために数多くの施策が取り組まれているが、これらの中で最も象徴的な環境施策としては風力発電が挙げられる。年間平均風速7.2m/sの風を活かし、四国カルスト高原に発電能力600KWの風車が2基建設され、1999年から稼働している。風力発電による電気は四国電力に売電(売電単価11.5円/KW)され、年間売電総額は約4,000万円に上る。風力発電で得たお金は環境基金へと組み込まれ、町の環境施策の資金源となる。梶原町では2050年までに40基建設することが計画されており、風力発電は低炭素社会の実現のための切り札となっている。

一方、その他の新エネルギー施策としては、太陽光発電、小水力発電、バイオマス活用などがある。住宅の太陽光発電に関しては、1KW当たり20万円(4KWを上限)の町独自の補助制度があり、住宅の太陽光発電のこれまでの設置実績は104件(設置率約6%)である。国の補助を合わせると1戸当たり総額108万円の補助となる。2050年までに住宅で500戸の導入が目標とされており、これを現在の世帯(約1800世帯)で割ると約28%の設置率となる。小水力発電については発電出力53KWの発電機が中心市街地に設置されており、昼間は地元中学校へ、夜間は町内の街路灯へ電力が供給されている。木

質バイオマスの活用では、梶原町・矢崎総業・森林組内・高知県の共同事業として「木質バイオマス地域循環利用プロジェクト」がある。この他に地熱エネルギーの利用したものは、230KW相当のエネルギーを供給できる温水プールの事例がある。

また、環境に配慮した省エネルギー施設を代表するものに2006年度に完成した「梶原町総合庁舎」が挙げられる。設計は建築家隈研吾氏によるもので、同施設はCASBEEでSランクの認定を受けており、更に省エネ機構よりサステナブル建築賞を受賞している。

梶原町の標高は200m~1456mであり、山あいに位置することから、林野率91%の森林空間を如何に低炭素なまちづくりに結びつけるかは大きなテーマである。

森林を活かした環境の里づくりの取り組みでは、木材資源を活かす、木材資源を育てる、森林空間を活かす、の3つの柱が据えられている。木材資源を活かす取り組みとしては地元材を使った公共建築の建設が、木材を育てる取り組みとしてはFSC森林認証による持続可能な森づくりが、森林を活かす取り組みでは森林のもつ保健休養機能を活かしたセラピー植物観察などが行われている。

森林資源を育てるに関しては、間伐を行った森林所有者に対して交付金(10万円/ha)を支給する事業(梶原町水源地域整備交付金事業)を行い、林業版カッピング施策を通して、間伐の促進による環境保全や林業活性化に取り組んでいる。更に、昨今の公共事業の大幅な縮小に対しては、建設業と林業が連携した林建協働の取り組み「ゆすはら森の3R事業」も行われており、林業を中心とした新たな雇用創出も模索されている。

以上のような梶原町の環境施策と低炭素なまちづくりの事例紹介の後、休憩をはさみ後半の約1時間は、参加者を含めた意見交換が行われた。

参加者からは「木質バイオマス事業は、他の市町村でも同様の事業成果・採算性を上げることは可能か」「多様な環境施策の実施は財政への影響(負担)はないのか」「運輸・交通部門での環境施策としてはどのような取り組みが行われているか」「FSC森林認証によりどのような効果がみられるか」「紹介された環境施策の取り組みにより新たな雇用創出はどの程度あったのか」「風力発電の建設による景観上の問題は発生していないのか」など活発な質問が寄せられた。

約2時間を越える研究会後には、講師を囲み懇親会が行われた。懇親会では、講演会では十分に理解できなかった梶原町の環境施策に関する質疑や、梶原町に



都市計画研究会の会場風景

における住民主体のまちづくり(匠の会)の紹介、中山間地域の今後の展望など活発な意見交換が行われた。美味しいお酒と料理の演出が効き、懇親会は3時間におよび、大いに盛り上がった。

(文責：篠部 裕 / 呉工業高等専門学校)

第2回都市計画研究会

中四国発・低炭素社会とまちづくり

- 現場に学ぶ技術と暮らし - (シリーズ第4回)

テーマ: 『地産地消・コンパクトによる低炭素社会は実現可能か』

講師: 天野 耕二 氏 (立命館大学 理工学部 教授)

日時: 平成22年11月20日(土) 14:00~16:00

場所: 広島県情報プラザ

主催: 社団法人 日本都市計画学会中国・四国支部

参加者: 22名

低炭素型社会の実現に向けて、食べ物や住まい方がライフサイクルの中でどのように影響しているのかという観点から、温室効果ガス削減のシナリオを仮定し、定量的に分析・評価した結果が紹介された。



【講演の概要】

‘住’のコンパクト化が省エネ型まちづくりにつながるか？

まちは野放しにしておくと、スプロール化が進み、自動車利用は増加し、結果として温室効果ガスの排出量は増加することとなる。様々な都市の人口密度と1人当りの交通エネルギー使用量の関係を見ると、人口密度の高い方が交通エネルギーは小さく、人口密度が低いほど交通エネルギーは高くなっていることがわかる。コンパクトシティ政策を考える場合、交通起源のみならず住宅起源のCO₂排出量の増減についても考慮しなければならないと考える。

そこで、滋賀県大津市を対象として2000年から2030年の間、現状で推移した場合と、都市機能が集約化した場合の交通起源と住宅起源のCO₂排出量を推計・比較した。

交通起源のCO₂排出量は、人口、自動車や鉄道等の機関分担率、平均移動距離などから推計した。住宅起源のCO₂排出量は、建替え更新時期を考慮しながら、解体・新設に伴う廃棄物排出量と、居住形態(戸建・集合)別に、建設(資材製造・輸送・施工)運用(冷暖房・給湯・照明)維持・修繕(施工・輸送・資材製造)のライフサイクル毎にエネルギー消費を算出した。

結果、2030年までに7.9%の人口が居住地を集約することにより、交通起源のCO₂排出量は2.2~3.3%程度、住宅起源のCO₂排出量は0.04~0.05%程度の削減が期待されると推計された。また、交通起源における要因分析の結果、大津市の場合には、駅周辺部に集約するよりも、移動距離の短縮につながる地域に集約した方がCO₂排出量削減に望ましいことがわかった。

一方、昨今の自動車の燃費改善効果や電気自動車の普及などを考えると、都市集約化によるCO₂削減は僅かであるため、都市集約化が施策として果たして有効なのかどうかは今後更なる検討が必要である。

‘食’に関する温室効果ガスの排出は？

次に、食料消費に伴う温室効果ガスの排出量について考える。

昨今、食材の長距離輸送や旬の消失が問題視され、地産地消や環境保全型農業が注目されている。食料は農業生

産・物流・調理過程の各段階で温室効果ガスを排出しており、生産から消費・廃棄までを一体的に考慮したライフサイクルアセスメントによる評価が重要となる。また、生産段階での温室効果ガスとしては、CO₂のみならず、CO₂の21倍にもなるCH₄(メタン)等が相当量発生しているといった現状もある。

まず、『食』の“旬産旬消”に着目し、野菜目別に温室効果ガスを試算した。結果、施設栽培となる品目の場合には圧倒的に温室効果ガスの発生量が多くなるため、それらについては旬産旬消の有効性が大きいと期待できる。また、調理方法別(生食・ゆで・炒め・煮込み)で栄養素摂取量に対する温室効果ガスを比較すると、ゆで調理の環境効率が低い(同じビタミンC含有量としたとき、より多くの温室効果ガスが発生する調理法である)ことがわかった。

次に、青果物に関わる環境負荷削減について、下記の7つのシナリオを設定して削減効果を試算した。

地産地消	各都道府県の生産・消費量を変えずに総輸送距離を最小化
モーダルシフト	500km以上の自動車輸送の50%を鉄道にシフト
旬産旬消	冬季の施設栽培品の20%を夏季の消費にシフトし、重量・栄養面で同等の他の野菜を夏季から冬季にシフト
食品ロス削減	家庭での食品ロスを20%削減
施肥量低減	栽培での施肥を20%低減
施設栽培省エネ化	施設栽培での加温エネルギーをヒートポンプ(空気熱源)に転換
食品リサイクル推進	食品廃棄物全量を堆肥化又はメタン発酵

7つのシナリオを全て実施した場合には22.7%の温室効果ガスの削減が期待でき、寄与率としては、施設栽培省エネ化、旬産旬消、地産地消の順であった。

『食』における温室効果ガス削減に向けては、“地産地消と適地適作による輸送距離の短縮”旬産旬消とハウス栽培における温室の省エネ化”を考えていかなければならない。

【質疑応答など】

都市機能の集約化は温室効果ガス低減に余り効果がないという結果であるが、人の移動はどのように考えたのか。

今回は住宅統計を用いて順次移動するシナリオで計算しており、移動のテンポがスローとなったため、30年くらいでは削減効果が出なかったと考えている。

郊外の土地を売って駅の周辺に移動できればよいが、現実的にはそう簡単には売れないと思われるが、今後、消費者実態調査や家計統計年報等のデータから消費構造を明らかにし、郊外型から都心型に移動するモチベーションがどうなのかといったところを踏み込んで検討していきたいと考えている。

国民の省エネに対する意識は年々変わってきている。20~30%くらいは意識づけで変わってくるのではないだろうか。意識改革、醸成が重要である。これからは、ライフスタイルデザインという視点が大切である。

【感想】

“食”“住”のライフサイクルの中で温室効果ガスの削減を推計するという新しい視点での研究であり、大変興味深い内容であった。一方で、ライフサイクルの中では、影響要因が多岐に亘り、それぞれが複雑に絡み合う構造もあるため、推計モデルの構築の困難さも感じたところである。

(文責: 高田 禮榮)

平成22年度第3回都市計画サロン

主題：ヒロシマ・オリンピックはこんなにも面白い

講師：松波龍一(日本都市計画学会中国・四国支部長)

日時：平成22年11月24日(水)18:30~20:00

会場：コンフォートホテル広島

今回は、「広島で本当にオリンピックの開催が可能なのか？」との疑問からスタートし、様々な角度から、実現可能性を検証し、実現のためのイノベーションについて、提案や発想を頂いた。



1 オリンピックの理念

古代ギリシャでは、オリンピックは平和の祭典であり、各ポリスはたとえ交戦状態にあっても、休戦して参加する義務が課せられ、このルールは「エケケイリア(聖なる休戦)」と呼ばれていた。現代でも、オリンピック憲章に基本原則は「平和な社会の推進」、目的は「平和でよりよい世界の建設への貢献」とある。

オリンピックを平和都市・広島で行うことは、やはりとても意義のあることであると考えられる。

2 オリンピックのスケールと広島の都市スケール

広島五輪の基本計画による計画フレームは次のとおりで、広島の都市スケールと合わない一見思われる点が確かに多く存在する。

開催期間：2020年8月7~23日(17日間)

競技数：23競技 304種目、**競技会場**：37会場

大会運営経費：4,329億円、**大会関連経費**：137億円

観客数：608万人

選手村：17,000人 10,000室

オリンピックでは、大会後マンション分譲するケースがほとんどであり、2012年のロンドン五輪もそうである。

広島都市圏でマンション供給戸数は1,500戸/年(2009年)であり、マンション供給が減少する前でも3,500戸/年(2007年)と釣り合いがとれない。

メディアセンター：115,000㎡(3~5階建)

広島バスセンター・そごうで地上10階建 111,000㎡であり、立地のよい敷地確保は非常に困難な状況にある。

宿泊施設：大会関係者用40,000室

広島50km圏内で15,000室である。やむを得ず1時間圏内として福岡・岡山等を取り込めば67,000室となりようやく条件をクリアできる。

3 イノベーションの必要性和可能性

競技会場等の仮設について

広島五輪の基本計画では、競技会場37のうち、メインスタジアムは広島ビッグアーチを改修するため改修が1、他に特設が17となっており、「仮設オリンピック」のイメージが強い。確かに2016年に立候補した東京や福岡ではメインスタジアムは新設であり、特設も東京5、福岡9と少なめであった。

しかし、従来より五輪は「仮設」が多いものであり、大いに検討すべきである。2012年のロンドン五輪でも、メインスタジアムは80,000人収容だが、大会後は25,000人収容に切り替える予定であり、その収容人数差は仮設のようなものである。また、2008年の北京五輪でも、BSTC(北京市科学技術コミッション)が大会のリサイクルプログラムを作成し、ロンドン五輪へ120,000㎡の仮設宿舍、80,000席のシート、延長240kmの仮囲いを転用することとしている。

大会運営経費について

広島五輪は運営経費の安い大会を提案しているとも聞いているが約4,300億円となっている。これまでの大会は2,000億円程度であり、2016年に立候補した東京や福岡も3,000億円程度である。

広島五輪は1,000億円の寄付が必要とされているが、経費自体をうまく削減できないかと考える。

選手村について

広島五輪において、以下のような今までにない発想ができないかと考える。

カプセルマンション：東京の「中銀カプセルマンション」(黒川紀章氏設計)では、需要用途に応じて臨機応変に対応可能だという。例えば1万室つくる場合では建設単価は大きく下がる。緊急に大量の集合住宅を造るニーズというのは世界に多くあると考えられ、五輪を契機に、新しいビジネスを創出できないだろうか。なお、当マンションは残念ながら取り壊しが決まっているという。

発泡スチロール造：熊本「阿蘇ファームビレッジ」では、近くにプラントを設けて建設したという。当ビレッジでは各棟は平屋であるが、積層にすることにより、さらに室数を稼げる。五輪において、発泡スチロール造の活用は考えられないか。

空き家の活用：2010年7月にオープンした呉の「石段の家」1号館は興味深い。これは木造2階建ての空き家を改装したもので、寝具は地元のホテルが回収し、洗濯、配送するしくみで、今後5年で計5館の運営を目指している。ちなみに、広島市内の空き家総数は78,000戸(2008年)で、うち賃貸用または売却用住宅が49,000戸である。五輪において、空き家の活用も考えられないか。



中銀カプセルマンション 阿蘇ファームビレッジ

今回の都市計画サロンは、参加者からも、空きオフィスを活用など、活発な提案・意見が飛び交いました。

広島開催が実現するかまだ分かりませんが、広島だからこそ、他にはない提案や発想が求められる。みなで知恵を絞る絶好の機会です。

(文責：渡田 賢治)

2010年度支部地域活動助成事業

四国のまちづくりに関する見学会&情報交換会

日時：平成22年11月30日(火) 13:00 - 17:00

場所：香川県宇多津町 こめっせ宇多津

参加者数：22名

徳島大学近藤先生からの申請を受け、四国地方整備局建設部、香川県宇多津町のご協力をいただき、2010年度地域活動助成事業として「四国のまちづくりに関する見学会&情報交換会」を開催した。会場は米蔵を改装したホールである「こめっせ宇多津」をお借りした。



会場：こめっせ宇多津

情報交換会 13:00 - 16:00

情報交換会では、防災をテーマとしたもの2件、宇多津町をテーマとしたもの2件、計4件の話題提供をいただき、意見交換を行った。

(1) 災害に強いまちづくり

(四国地方整備局建設部都市調整官 清川喜博氏)

これまでの防災まちづくりは、危険度判定の結果を優先順位付けや整備スケジュール等に反映することが十分行われておらず、また、浸水対策では河川や下水道等の施設整備が中心であった。



今後は、記録的な集中豪雨等への総合的な対策や、分野別のリスク情報の横断的な把握とそれを踏まえた都市の将来像の検討が必要である。また、歴史的な街並み景観の継承や市街地の復興について、自治体やコミュニティが平時から取り組むことが重要である。

国においては、自然災害リスクの高まりや人口減少等を踏まえた安全・安心のまちづくりの推進に向けて、「リスク情報の活用と連携によるまちづくり」「多様な手法の組み合わせによるまちづくり」を基本的考え方として、安全・安心まちづくりのアウトライン(案)を検討している。

四国においても検討会を組織し、どういう課題に対してどんな対応が必要かなど、地域の実情を踏まえた「防災まちづくりガイドライン(案)」の作成を行う予定である。

意見交換では、歴史的景観への配慮について特別の手法や地区要件があるのか、除去はできるが保存を対象とした補助メニューはないのでは、といった質問があり、例えば街なみ環境整備事業と耐震改修補助を組み合わせるなどの工夫が考えられるのではないかと回答があった。

(2) 防災まちづくりの支援システム

(徳島大学大学院シオテクノサイエンス研究部助教

渡辺公次郎氏)

専門はGIS(地理情報システム)を活用した都市計画支援システムの構築である。これまで、都市特性を反映した災害予測モデルや潜在的な危険性の評価モデル等とGISを統合した防災まちづくり支援システムを作成し、現在、ウェブサイトとARを用いた防災まちづくり支援システムを開発中である。



防災まちづくり支援の道具としては、GIS(場所の情報の把握)、AR(災害イメージの共有)、ツイッター(いろいろな意見の集約)、スカイプ(多くの人の参加)等が期待できる。道具の進化に対応した操作のしやすさに加え、住民参加、修復型まちづくりへの展開等が課題である。

住民が参加する場合その主体が誰かによって支援システムが異なるので一緒に研究しましょう、情報伝達に加えてそれによっていかに住民を行動させるかが課題、防災行動を喚起するルールづくり等の参考にできないか、等の意見交換がされた。

(3) 空き家調査を通じた街並み形成支援

(香川大学経済学部准教授西成典久氏・長通卓也氏(学生))

「宇多津町学術研究助成事業」に応募し、『宇多津町のまちづくりや自然、歴史に関する研究調査』として、空き家マップの作成その他実態調査を学生と一緒にしている。宇多津町古街の空き家率は7.7%と比較的少ないが、これは空き家の定義による面もある(家主が近所に住んでいる、時々帰ってくる、老人ホームにいる等は空き家としていない)。



空き家は町の活気を奪い、防犯や衛生上の不安要因である反面、よそから人を呼び込む資産であり、住んでほしい人を呼び込む戦略的なまちづくりのツールにも成り得る。

徳島県神山町のワークインレジデンスは、神山が求める働き手や起業家を、家・土地付きで公募している。

空き家の所有権調査が必要ではないか、岡山県内の伝建地区では相続は難しいのでこの町を気に入った人に貸して守って欲しいといった意向が強い、神山町ではワークインレジデンスで募集した薪パンが好調で生産が追いつかない等の意見交換がされた。

(4) 住民主体のまちづくり

(宇多津町政策調整室主査 蛭子智成氏)

宇多津町は今も人口が増えているが、古街がある旧市街地は減少している。平成15年度から18年度にかけて既成市街地の再生に向けた検討会やシンポジウム等を開催した。分科会等を含めると年間200回程度の会合を行い、多くの住民が参加して検討した。また、まちづくり交付金を平成17年度から21年度にかけて活用し、みちづくり(修景舗装、ライトアップ等)を中心に整備を進めた。



この間、先進地視察、明りの社会実験、日曜市等を通じてハード整備とソフトの仕組みを作っていった。

(財)民都機構の資金拠出を得て「宇多津町まちづくりファンド」をつくり、審査会を経て、まちづくりの段階に応じた活動や施設整備を支援している。行政の役割は基礎を支える岩盤であり、その上に地域が表土を作り、個人(住民)がその上に花を咲かせる。リアリティのある実体験にのみ人は感動するもので、学習、体験、経験を通じて組織が活性化していく。

景観づくりについて、私有地に対する支援を別制度で実施しているが申請がない、現在景観計画作成中でありこの中でルールや支援制度等を検討する予定である等の意見交換がされた。

最後に、近藤先生が「住民がまちづくりに関心を持つには、ハード、ソフト、マインドの3つが必要である。今日の話提供でも、この3つの観点が不可欠であることがわかった」と総括された。

見学会 16:00 - 17:00

場所: 宇多津町古街(こまち)地区

見学会は、地元の方3名のもご参加いただき、古街を案内していただいた。

懇親会 こめっせ宇多津(17:00~19:00)

懇親会は、こめっせ宇多津で、地元の方に用意していただいた料理をいただきながら、和やかに行われた。



宇多津町は塩田跡地につくられた新都市のイメージが強い。瀬戸大橋の付け根に位置し、臨海公園には高さ158mのゴールドタワーがそびえ、宇多津町のランドマークになっている。その付け根には女子大や結婚式場などもある。町の印象も「新」「活」「賑」「華」と言いたところか。

しかし、当たり前のことであるが、宇多津町にも歴史がある。古街には港跡、神社仏閣、旧丸亀街道沿いの町家等が凝縮している。

魅力的な都市とは、変わり続ける包容力と、変わらない個性を備えているそうだ。宇多津町は、古街のまちづくり活動を通じて、新旧のコラボレーションが魅力を再生産している町である。

(文責 佐伯達郎)



第5回ひろしま自転車トーク2010

日時：平成22年12月11日(土) 13:30～16:30

場所：広島市まちづくり市民交流プラザ

プログラム：

【第1部】

- 1.基調講演「低炭素型まちづくりと自転車」
広島大学大学院 教授 藤原 章正
- 2.建設コンサルタンツ協会中国支部 活動報告
建設コンサルタンツ協会中国支部 手塚 誠

【第2部】

- 3.自転車トーク
＜パネリスト＞
 - ・藤原章正(広島大学大学院 教授)
 - ・三木登士也(広島市道路交通局道路交通企画課 交通施策調整担当課長)
 - ・若狭利康(広島市中央部商店街振興組合連合会青年部)
 - ・増田泉子(中国新聞社地域情報センター)
 - ＜コーディネーター＞
 - ・山中英生(徳島大学大学院 教授(地域連携推進室長))
- 主催：(社)建設コンサルタンツ協会中国支部
共催：広島市、(社)土木学会中国支部 (社)日本都市計画学会中国四国支部
参加者：97名

【第1部】

- 1.基調講演「低炭素型まちづくりと自転車」
広島大学大学院 教授 藤原 章正

「低炭素型まちづくり」「自転車の特徴」「これからの自転車」の3つのテーマで講演された。

低炭素型まちづくり

低炭素型まちづくりについては、1997年の京都議定書以降に、目標数値などが積み上げられ、2010年8月に低炭素都市づくりガイドラインが出され、進められている。

低炭素型まちづくりと自転車の関係をみると、エネルギー効率の改善、需要の縮減、健康増進などの役割があると考えると提言された。

エネルギー効率においては、自転車のCO₂排出量は他の交通機関と比較して少ない。交通機関の分担率をみると、三大都市圏では自転車の分担率は増えてきており、地方都市では自転車の分担率が減少している。一方、CO₂排出の増加率は都市圏で小さく、地方都市で大きいことから、自転車の利用はエネルギー改善に寄与している。

健康増進については、自転車の価値は身体的健康だけではなく、精神的健康、社会的健康にもつながり、医療費の削減や自殺者の削減に効果があるのではないかという仮説もあり、学術的に証明しようという動きもある。

自転車の特徴

自転車には正の便益と負の便益がある。負の便益について、安全面の問題では、自転車の保有率は伸びていっているが、自転車に対する走行空間の整備の状況は足りていない。そのため、自転車の事故は、右肩上がりで増えている。

駐輪の問題については、自転車は1日のほとんどが駐ま



っている。自転車道よりも駐輪施設の整備の方が優先でないか、もしくは駐める場をつくるか、駐めない工夫が必要である。

また、広島市における1999年度の社会実験(都市型レンタサイクル)からの知見(自転車の効率的利用、駐輪スペースの節約、市民の意識の醸成など)から自転車の特徴について分析された。

最後に、「ネットワーク整備の疑問」から、自転車線形性がくずれない、ネットワークがくずれない工夫が必要であり、「リンク整備からブロック整備へ」の必要性が指摘された。同じ道路でも、右側と左側を通る人で異なる。道路と同じようなネットワーク分析を行ってもよいのかという指摘がされた。

これからの自転車

マナーの前に法制度が重要であることや、意外に守られていない「自転車安全利用5則」について提言された。また、「選択の多様化」が進むなか、「自転車は耐えるか」という問題提起から、特に高齢化が進むオールドニュータウンの復興にはPM(パーソナルモビリティ)が重要になってくることが提案された。

- 2.建設コンサルタンツ協会中国支部 活動報告
建設コンサルタンツ協会中国支部 手塚 誠

自転車研修会の活動紹介

過去4年間の活動として、自転車アンケート調査や自転車マップの作成、自転車イベントの開催などに取り組んできており、4年目、5年目でフィールドの拡大に取り組んでいる。

活動メンバーからの『100の提言!』中間報告

今年度は活動メンバーからの『100の提言!』をまとめており、主な意見とした次の提案などがある。

- ・“ひろしまリバーサイクリングコース”をPR
- ・短時間利用向けの駐輪サービス
- ・“街中での自転車利用に関するマナーアップ”
- ・コミュニティサイクルによる自転車利用の促進
- ・“ひろしまサイクルフェスタ”などイベントの開催

最後に、あめとムチの使い分けが大切であること、広島らしい自転車文化を作ることが必要であるとまとめられた。

【第2部】

- 3.自転車トーク
＜コーディネーター＞

・山中英生(徳島大学大学院 教授(地域連携推進室長))
「自転車まちづくり多様性へ」をテーマに、自転車まちづくりにおけるイギリスの試みについて紹介があった。

“Shared Path” “Shared Use” “Barclays Cycle Superhighway”などの事例から、道路空間構成の戦略として、段階的に自転車を歩道から分離することが提案された。



また、多様な自転車空間においては「インフォマティビティ(情報伝達性)」が重要であり、自転車の通行ルールの情報伝達として通行位置や方向、安全速度などを表示するデザインについて提案された。



<パネリスト>

・三木登士也(広島市道路交通局道路交通企画課 交通施策調整担当課長)

平成 22 年 7 月に策定した「広島市総合交通戦略」について説明された。これは「新たな交通ビジョン」と「交通ビジョン推進プログラム」を取りまとめたものである。広島市の交通における 6 つの課題が整理され、交通実態調査の結果では、通勤目的では自転車の割合が増えており、買物目的では自動車の割合が増えていることが示された。

今回の見直しで新たに『自転車の「都市交通手段」としての復権』の項目を盛り込み、「安全で快適な自転車空間の確保」「放置自転車対策の推進」「自転車利用者のマナーアップ」に対する施策や社会実験について紹介された。

・若狭利康(広島市中央部商店街振興組合連合会青年部)

商店街の主な事業として、駐車場システム事業に関わっており、通行に関する問題、放置自転車問題を抱えている。

商店街が生き残るためには自動車に対する対応が必要であるが、自転車に対する施策がなかなか見つかっていない。特に、放置自転車に関しては、なかなか改善できていない。

駐輪場の回転率・利用率は 1.1 倍であり、ほとんど 1 回とめると夜までとめている。通学通学で利用している人が多い。市営駐輪場は朝 10 時ぐらいになるとほとんど満車になる。駐輪場にとめようと思っても、とめることができない状態であり、無料駐輪券の発行を試みたが、なかなか改善されない。

・増田泉子(中国新聞社地域情報センター)

「広島市総合交通戦略」で「自転車の復権」が掲げられたが、参加者のなかで、「自転車の復権」を知っている方はどれくらいいるか。理屈では知らなくても、暮らしの中で自然に浸透していくことにチャレンジしないとイケないのではないか。という問題提起から、「広島スタイル」というのが必要であることが提案された。

数年間で、しまなみ街道が自転車のメッカになりつつあるが、「広島スタイル」を考えると、市内ではママチャリが多く、ゆっくり走っている。スピード、乗っている人もバラバラのなか、きめ細かく対応していかないとイケない。市役所だけで「広島スタイル」を作っているのではない。市民に浸透させていかないとイケないという提案がされた。

パネルディスカッション

<駐輪の問題>

コミュニティサイクルや短時間駐輪場の実現の可能性はあるか。駐輪場はかなり従業員の長時間利用となっており、短時間駐輪を考えていく必要がある。

パリでは、各住宅とオフィスに駐輪場を作らせている。そうすると都心は短時間化していく。

<PRに視点>

広島スタイルとしてアピールしていくためにはどうすればよいか。自転車を使うとファッションブルに見えることも必要である。外国人が使いやすく、遊び心も必要である。

<連携の視点>

お店だけの連携だけではなく、いろいろな交通機関との連携も必要である。連携策の中で採算性があう取組を行っていくなど。市役所だけでやるのではなくて、いろいろな所とコラボしていく必要がある。

<その他>

その他に会場から、安全に問題に関する提案や、広島と宮島間の自転車道を整備してはどうかという提案があった。

会場からの質問・意見交換

最後に会場からの質問・意見交換を行った。

<PRに視点>

・市民の身近なものなので、市民に集まっていただいて、意見交換できる場をコーディネートしていただくと広まるのではないかと。

・松山でも取り組んでいて、PRの難しさはある。自分たちが参加したことを実感することが必要である。走りやすさマップをつくるために、実際に走ってもらって評価してもらうという取組を行っている。

<イメージづくり>

・興味をもっている人は自転車トークやワークショップもやっているが、地味である。年 1 回は、イベント風のトークをやり、市民にわかりやすい活動をしないとイケないと思う。

<連携の視点>

・販売店やメーカーとの連携はどのように行っているのか。など活発な意見交換が行われた。



感想

専門家から一般市民まで数多くの参加があり、自転車まちづくりの普及や「自転車トーク」の定着が実感でき、建設コンサルタンツ協会中国支部の継続的な活動の成果が感じられるフォーラムであった。

(文責 石村 壽浩)

会員活動報告

大山・隠岐国立公園を生かした地域再生研究会活動報告

1. 研究会の概要

本研究会は、2010年4月、大山・隠岐国立公園を生かした山陰地方の地域再生の条件を明確にすることを目的にスタートしました(表1)。山陰地方唯一の国立公園である大山・隠岐国立公園の多くの魅力を理解し、それらを活かしたまちづくりについて考察しています。現在は隔週で勉強会を開いているほか、調査やイベントも行っており、地域関係者や米子高専の学生などが参加しています。今後も勉強会を継続し、下記の調査に基づいた論文などを学会の場で発表していきます。

2. 大山・隠岐国立公園としての成り立ち

国立公園は優れた風景地の保護と利用を目的に設けられています。中国山地の主峰である大山は、国立公園の草創期(大正10年頃)から候補に名を連ね、日本を代表する風景の一つとして考えられてきました。昭和11年に大山国立公園として指定され、特に大山寺地区ではスキーや登山等のレジャーと社寺や参道が残る歴史探訪場として観光客を集めるようになりました。昭和38年には蒜山地帯、三瓶山、島根半島、隠岐諸島の編入により範囲を拡大し、大山・隠岐国立公園と名称を変更しました(註1)。しかし1990年代の居住者や観光客の減少が問題として浮かび上がるようになり、旅館街を中心に衰退が進みました。これを受けて1990年代後半から、地域再生を支援する諸団体の事業が動き始めました(表2)。このような状況の中で、諸団体の活動について把握すると共に大山寺地区の魅力の再考が重要であると私たちは考えています。

(註1) その後平成14年には毛無山地区が編入し現在の姿となっています。

3. 活動内容

大山寺地区に残る僧坊跡(石垣など)を始め、魅力ある歴史的町並みを中心に現地調査を行いました(写真1,2)。大山寺地区の景観的特徴を明らかにすることを目的としています。現在は、大山寺地区と同じく、天台宗の僧坊(里坊)を持ち、重要伝統的建造物群保存地区である滋賀県の比叡山坂本との比較も視野に入れ考察を進めています(写真3,4)。

大山寺地区の住民と宿泊施設・土産店等の企業運営者を対象に、居住環境の実態や大山寺地区の景観的特徴に対する意識を把握するために、アンケート調査を実施中です。

表2 大山・隠岐国立公園の地域再生を支援する諸団体の事業一覧

	平成19	平成20	平成21	平成22	組織環境	目的
大田建設事務所 大田建設事務所 大田建設事務所	●11月 大田建設事務所(内務省)との連携の下まちづくり活動	●20年 大田建設事務所が 大田で調査	●21年 大田建設事務所が 大田で調査	●22年 大田建設事務所が 大田で調査	・大田建設事務所 ・大田建設事務所 ・大田建設事務所	大田建設事務所が 大田建設事務所が 大田建設事務所が
大山寺地区 大山寺地区					・大山寺地区 ・大山寺地区	大山寺地区の 大山寺地区の
大山寺地区 大山寺地区					・大山寺地区 ・大山寺地区	大山寺地区の 大山寺地区の

1月21日には、地域再生に精通する山口大学の鶴心治先生を講師として招聘し、講演会を開催する予定です。

講師：鶴 心治

教授・博士(工学) 山口大学 大学院理工学研究科
情報・デザイン工学系学域 建築デザイン工学分野

日時：2011年1月21日(金曜)午後13時20分～
会場：米子工業高等専門学校 専攻科シアター
題目：地域再生に関する活動やアイデアについて(仮)

表1 勉強会メンバー

米子工業高等専門学校	米子工業高等専門学校
山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司	山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司 山本 隆司



写真1 大山寺地区の僧坊跡



写真2 阿弥陀堂につながる石垣の道



写真3,4 比叡山坂本の町並み(2010年9月現地調査の際に撮影)

(文責：小椋 弘佳)

ホットコーナー・コラム

都市観光の視点からみる「マニアックまち歩き」

吉原俊朗

昨年(2022)の10月16日(土)、広島市内にて、アーキウォーク広島(<http://www.oa-hiroshima.org/>)主催の建築巡りイベントが開催され、筆者も企画から参加しました。「建築をめぐって知らなかった広島を探しに行こう!」というタイトルで、募集人数40人に対して申込は100人以上。建築好きだけでなく、まち歩きが好きな人、デザインやアートに興味がある人、歴史好きな人など、多様な人々が集まりました。また、広島市内だけでなく、中国地方各地、関西、関東からの参加があり、日本人だけでなく外国人の参加もありました。他にも12月にはひろしまジン大学(<http://hirojin.univnet.jp/>)の講座の1つで丹下健三の都市軸を巡る講座が行われています。



広島での建築巡りイベントの様子
(普段は入れない市営基町高層アパート屋上庭園。新たな発見、初めての体験は参加者満足度が高い。)

実はこのような建築巡りイベント。イギリス・ロンドンでも毎年9月に『Open House London』として実施されています(<http://www.londonopenhouse.org/>)。いつも外から見ている建物に、ガイド付きで入れるというイベントに、毎年大勢の参加者が詰めかけているようです。建築マニア、建築オタクだけでなく、一般的に建築を見て歩くことを楽しむことができる。建築を見るために遠くから人がやってくる。つまり、都市観光の1つとして「建築」を考えることができるわけです。

そう考えると、地下空間や路地など、「まち」を構成するどのような要素でも歴史や文化があるわけで、見慣れた風景の中に新しい価値を見いだすことができる切り口は意外と多そうです。観光ニーズが、従来型の団体旅行から、十人十色、いや、一人十色と言われる個別ニーズに応じた個人旅行へと転換してきた今日、路上観察的な視点での「まち歩き」に加えて、専門的な知識も得られる少し詳しい解説付きの「マニアックまち歩き」が観光のキーワードになってくるとも言えます。

さて、ここで重要になってくるのはガイドです。専門

的な知識を持っていない人にも興味を持ってもらいながら、少し専門的な話も織り交ぜて知的満足度を与えるバランス良い解説が必要です。広島を代表する建築を例にとると、「世界平和記念聖堂」には、聖堂の隅々まで丁寧な解説して頂けるボランティアガイドさんがおられます。高松市で実施されている「高松まちかど漫遊帖」という取り組み(<http://manyucho.ashita-sanuki.jp/>)では、市民が自分の好きな(得意な)所を案内して回る、市民ツアープロデューサーによる「まち歩き」が春と秋に行われています。



世界平和祈念聖堂(広島市)のボランティアガイド
(外壁が粗い目地になっている理由など、細かく丁寧なガイドは専門外の人にも興味深い内容。)

旅行者のニーズに対応していくことは大変ですが、自分が好きな所を案内して回り、興味のある人が参加してくれる形態であれば、誰でも何かのガイドができるかもしれません。お酒好きの人は酒蔵巡り、アニメオタクは聖地巡り、自転車好きの人は自転車でのまち歩き(まち走り?)、1人でやるのは大変ですが、いろんな人がまとまると、新たな発見の多いまちになりそうです。

既存資源の活用、再発見、市民参加などのキーワードで表される「マニアックまち歩き」、個人的には高いところからまちを眺めるのが好きなので、「屋上巡り」をしたいと思います。興味のある方、一緒にいかがですか?



上から見た広島・本通商店街
(いつもと違う視点でみると楽しい。「屋上巡り」で本通アーケードの上のキャットウォークを歩いてみたい!)

会員紹介

西成典久(にしなりのりひさ)

香川大学経済学部准教授

プロフィール

東京都中野区出身です。小学校2,3年生のときに兵庫県伊丹市で過ごしましたが、ほぼ30年間東京で暮らしてきました。

2009年4月に香川大学に赴任

し、地方都市の豊かさを感じながら高松暮らしを楽しんでおります。仕事や旅行で日本各地を巡った際、瀬戸内海の豊かさに感動し、いつか瀬戸内で暮らしたいと心に秘めていたところ、思ったよりも早くその夢が実現しました。

学生時代は東京工業大学の景観研究室に在籍し、博士論文では日本の近代都市計画を批判的に乗り越えようとした石川栄耀の活動に着目し、その成果を『都市計画家・石川栄耀 都市探求の軌跡』(共著、鹿島出版会)として出版しました。

高校生のころ、歴史科目が苦手で理系に進んだのですが、現在は歴史的なアプローチで研究を進めることに大きな意義を感じております。それぞれの土地にある生々しい歴史と景観に心惹かれます。

博士修了後は、建設コンサルタント、立教大学観光学部を経て現職です。これまで実務では公共空間の計画設計を中心として、別府海岸の改修整備計画や北陸新幹線飯山駅周辺整備計画、東京月島の運河再生計画等を担当しました。

現在の取り組みと関心事

香川大学では、まちづくり論と景観論を講義しています。現場で考え現場で学び現場で行動することを重視し、なるべく学生を地域に連れ出しています。地域と学生を結び付けることに大学教員としての責務を感じています。

これまでは専門分野の景観にこだわっていましたが、香川に来てからは地域の構造的衰退や雇用問題など、より広い社会問題の解決へと関心事が移ってきました。具体的な取り組みとしては、女木島耕作放棄地での南京豆づくり、宇多津町の空き家対策調査、五郷地区でのシビックプライド醸成事業に取り組んでいます。これからは、人と土地(地域)を結び付けるような仕事をしていきたいと考えています。地域活性化の先に、後世に残していける美しい景観づくりを目指しています。

最後に、昨年度私が設計を担当した香川大学幸町南キャンパス改修整備事業を写真でご紹介します。



香川大学幸町南キャンパス整備前(左)整備後(右)

繁茂する松林を移植し、石畳と芝生の広場へと公共空間をリノベーション

会員紹介

目山直樹

(めやま なおき)

徳山工業高等専門学校

土木建築工学科

略歴

1963年生 / 山口県下関

市出身 / 1984年3月徳山

高専卒業 / 1986年3月豊

橋技術科学大学建設工学課程卒業 / 1988年3月同大学院建設工学専攻修士課程修了 / 1992年7月同大学院博士後期課程単位取得 / 1992年8月～2010年3月(株)福山コンサルタント勤務 / 2010年4月徳山高専准教授。現在に至る。

コンサルタントから高専教員へ

徳山高専の目山(めやま)です。昨年4月より土木建築工学科で建築計画や都市計画に関する科目を担当しています。前職の福山コンサルタントでは西日本事業部(広島市)に5年ほど勤務し、さまざまな活動に参加させていただいたので、当支部会員諸兄には、これまでもお世話になっています。

これまでの業務経歴など

これまで、東北・東海・中国・四国・九州の27県で、都市計画や空間デザインに取り組んでおり、それぞれの地域で生活体験をしてきました。

都市計画コンサルタントとして、主に、都市基盤整備に関わる企画・調査・計画から都市のマスタープランまでの分野に携わってきました。北九州市八幡東区の東折尾地区の都市開発(現在のJR陣原駅周辺)や、秋田県や岩手県の都市計画区域マス、倉吉市都市計画マスタープランがその一例です。

勤務先が道路計画・交通計画を得意としていたので、道路空間デザインや道路交通プロジェクトに関わる計画・調整にも関わらせていただきました。その一例が、土佐道路(高知市)の道路空間デザイン、福山都市圏や岡山都市圏でのモビリティマネジメントです。

教育・研究・地域貢献のこれから

今後の抱負は、卒業生でもある実務家として高専教育に関わり、実務経験をふまえた研究や地域貢献を展開したいと考えています。会員の皆様には、いろいろなどころでお世話になるとは思いますが、よろしくお願いたします。

【研究】山口県下や周南地域をフィールドとして、高度成長期の都市計画と土地利用、市街地形成の関係について、研究を進めているところです。

【地域貢献】「まちづくり community-based design」を専門とする一人として、「交通まちづくり」「防災まちづくり」の分野で地域社会と関わりたいと思っています。徳山高専では学科をあげて「小・中学校向けの防災出前授業」に取り組んでおり、私も一員に加えていただいています。

徳山高専と目山に関する情報は下記 web サイトをご覧ください。http://www.tokuyama.ac.jp/

http://www.tokuyama.ac.jp/profiles/meyama.html

トピックス

東大生と高専生によるまちづくり活動 「なかうみワークショップ2010」

東京大学都市工学専攻 修士・博士課程学生
准教授 城所哲夫、助教 片山健介
米子高等専門学校 専攻科建築学専攻1年生
講師 細田智久、教授 熊谷昌彦

ワークショップ開催の経緯

本ワークショップは、昨年実施した米子市の中心市街地活性化へのまちづくり提案をまとめた「よなご・かえるワークショップ2009」に引き続いて開催しました。今年は、東京大学都市工学専攻大学院生(城所研究室)10名と米子高専専攻科建築学専攻生8名との協働で実施し(表参照)、昨年よりも広域な中海圏域(島根県松江市や鳥取県米子市など4市1町にわたる地域)の活性化への提案作成を目指しました。米子高専は専攻科1年生の演習科目「創産設計実習」の課題として取り組みました。

ワークショップの概要(写真参照)

協働は2010年10月から11月の約2ヶ月にわたって行いました。東京と米子との距離がある中で、東大生と高専生がミックスした4グループ(全体、自然、歴史文化、交流)に分かれ、メーリングリストやウェブ動画で相互の資料や提案を交換しました。

11月20日から23日の4日間は、東大生が米子に訪れ、バスツアーなどで現地も把握した上で、具体的な提案をまとめました。最終日には、米子コンベンションセンター1階情報プラザで一般公開の成果報告会を行い、民間団体や行政関係者の方々から多くの賞賛をいただくことができました。

具体的な提案内容(図参照)

4グループの共通コンセプトとして、島根県出雲市から鳥取県米子市までの県境を越えた「出雲大山都市圏」としての連携の必要性を打ち出しました。その中で、全体グループは「HOME 追憶のカケラと未来のカタチ」として、出雲大山都市圏を1つの「家」と考え、「部屋」にあたる各市町の現在の特徴を伸ばしながら連携する方法や観光モデル圏域の構築などを提案しました。さらに、既存のJR境線(米子から境港)と一畑電鉄(松江から出雲)に新しい水上交通(境港から松江)を追加することで、スローな旅を楽しむ新たな観光ルートづくりも提案しました。自然グループは、「RESET NAKAUMI 人と自然のプラットフォーム」として、中海の低・未利用干拓地を汽水湖リサーチや環境学習の拠点にすることを提案しました。歴史文化グループは「レイライン 見えないものを見るように」として、神話・光・水によってつながる出雲から大山までを一体的にブランド化し、さらに古代から現代までのアートの道づくりを提案しました。最後に交流グループは「ダンデライオンプロジ

ェクト」として5感(見・食・聞・香・触)にうったえる小さなイベントプロジェクトを圏域の各所で連続して行うことで、最終的には圏域住民の心のかけ橋になるような大規模フェスティバルの大輪を咲かせようという企画を提案しました。以上のように、ダイナミックな県境を越えた「出雲大山都市圏」の構想とともに、未来に向けた多くの具体的な提案をまとめることができました。

(報告者 細田智久・熊谷昌彦)

表 ワークショップのメンバー

東京大学大学院都市工学専攻 城所研究室	米子高等専門学校 専攻科建築学	協力者
修士課程+研究生 7名 ジョン ブレイクニー、ブリュッガー アラン、小野悠、隅田順、鳥海陽史、奥田朋仁、マー シ	専攻科1年 8名 遠藤佳純、古安真紀子、角奈津子、田中良和、寺本哲郎、中村泉、村岡翔太、和仁佐緒里	梶谷彰男(県土木技師、城所研OB)、鳥取県西部総合事務所、中海市長会、中海テレビ放送
博士課程 3名 エドワーズ サラ、イムサンヨン、ユン ヘヨン	教員 熊谷昌彦 教授、細田智久 講師、小椋弘佳 助教、兼子朋也 准教授	
教員 城所哲夫 准教授、片山健介 助教		

写真 自然と交流の2グループ間で検討する様子



図 神話・光・水によってつながる出雲大山都市圏



トピックス

白島新駅設計者選定競技について

広島市道路交通局都市交通部

森田 環

競技実施の目的

広島市は、アストラムラインとJR山陽本線の交差部にそれぞれの新駅を設置して相互を通路で結ぶ「白島新駅の整備」に取り組んでいます。

白島新駅は都心に近い本市有数の交通結節点となるものであり、市民や利用者によく親しまれる施設として、デザイン的にも機能的にも優れた空間をつくりあげることが求められます。

さらに、既存の幹線道路や鉄軌道施設に囲まれた厳しい条件も考慮すると、通常の入札方法ではこれら多くの要件を解決できる最適な設計者を選ぶことは難しいため、設計者選定競技を実施して設計者を選定することになりました。



競技の概要

通常の競技方法をとれば、駅舎(特に地下駅)の設計実績を重視して設計者を募集することになり、従来の駅舎デザインを大きく超えられないであろうこと及び白島新駅が市民の憩いの場としても活用されるよう、人間空間のデザインに優れた建築家からの提案も求めたいことから、設計業務を意匠設計と詳細設計に分け、建築設計事務所を対象とする意匠設計者選定競技と建設コンサルタントを対象とする詳細設計者選定競技の2つの競技を実施しました(それぞれ二段階審査方式)。

2つの競技を行うに当たり、意匠設計者と詳細設計者が互いの責務を果たしつつ緊密に連携して、協働で設計を進めることを募集の条件として示しました。

意匠設計者選定競技の結果

7月15日に募集要項を公表し、8月12日の受付締切日までに国内67者(広島市12者、東京都37者、その他18者)から参加表明書等の提出がありました。

8月19日には、早稲田大学の古谷誠章教授を委員長とする白島新駅設計者選定競技選考委員会による一次選考が行われ、67者の中から5者が選考されました。

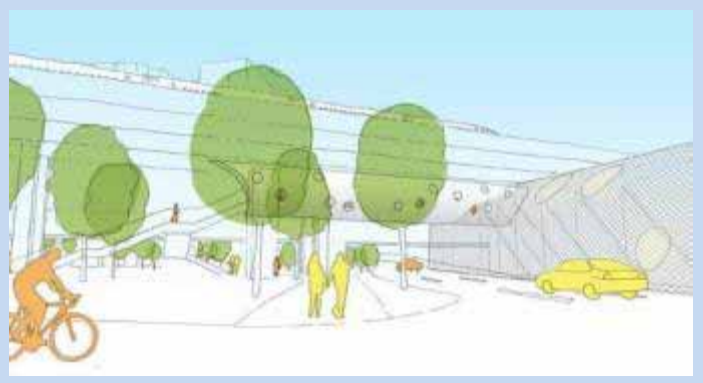
10月31日には、安田学園(中区白島北町)において一次選考通過者5者による公開プレゼンテーションを開催し、その後の選考委員会での二次選考により、最優秀者、優秀者及び入選者が次のとおり選考されました。

この結果を踏まえ、広島市では、11月19日に、最優秀者を当選者として、優秀者を次点者として正式に決定しました。

最優秀者 株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ
優秀者 株式会社加藤建築設計事務所
入選者 株式会社ワークヴィジョンズ
入選者 株式会社坂茂建築設計
入選者 株式会社林設計

〔最優秀者、優秀者、入選者の提案書の抜粋〕
提案書の著作権は各応募者に帰属します。

最優秀者 株式会社シーラカンスアンドアソシエイツ



優秀者 (株)加藤建築設計事務所



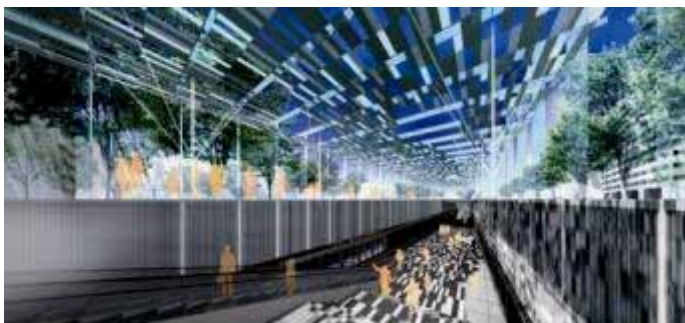
入選者 (株)ワークビジョンズ



入選者 (株)坂茂建築設計



入選者 (株)梓設計



詳細設計者選定競技の結果

7月15日に募集要項を公表し、9月10日の受付締切日までに5者から参加表明書等の提出がありました。

9月24日から28日にかけて、書面審議により選考委員会の一次選考が行われ、5者の中から4者が選考されました。

11月3日には、ヒアリングを実施した上で選考委員会での二次選考が行われ、最優秀者、優秀者及び入選者が次のとおり選考されました。

この結果を踏まえ、広島市では、11月19日に、最優秀者を当選者として、優秀者を次点者として正式に決定しました。

最優秀者

パシフィックコンサルタンツ(株) 広島事務所

優秀者

ジェイアール西日本コンサルタンツ(株)

入選者

(株)トーニチコンサルタント 広島事務所

入選者

八千代エンジニアリング(株) 広島支店

終わりに

今後は、平成26年(2014年)春の新駅開業を目指して、設計及び関係機関等との協議・調整を進めていくことにしています。

都市計画学会中国四国支部の皆様には、引き続き、本事業に対するご支援、ご協力をお願いいたします。

今後の活動計画

ひろしま文化都市フォーラム2010

「ひろしまの都市格と暮らし」- 2

日時:平成23年2月19日(土)13:30より

場所:広島市まちづくり市民交流プラザ
北棟6階マルチメディアスタジオ

学生による地域づくりネットワークシンポジウム

日時:平成23年2月20日(日)10:30~17:00

場所:高松市丸亀町レッツホールおよびドーム
参加大学:香川大学/香川高専、富山大学、愛媛大学、
高知大学、徳島大学他

地方工業都市研究成果報告会

日時:平成23年3月9日(水)14:00~17:00

場所:山口大学工学部(常盤キャンパス)D講義棟12号教室

テーマ:地方工業都市の広域連携と都市構造に関する研究成果報告会

学術講演会

日時:平成23年3月12日(土)14:00~17:00

場所:広島工業大学広島校舎201教室

テーマ:「建築をいかに作るか」から「建築をいかに使うか」へ

講演者:古谷誠章氏(早稲田大学大学院創造理工学研究科教授)

第4回都市計画研究会

日時:平成23年3月19日(土)13:30~15:30

場所:広島工業大学広島校舎301号室

テーマ:中四国発・低炭素社会とまちづくり-現場に学ぶ技術とくらし-

講師:市川尚紀氏(近畿大学工学部建築学科講師)

中国四国支部第9回通常総会・研究発表会

日時:平成23年4月16日(土)

場所:広島県情報プラザ(広島県立産業技術交流センター)

2011年度研究発表会募集要項

(社)日本都市計画学会中国四国支部 第9回研究発表会
<研究発表会募集概要>

発表内容:都市計画に関する研究、報告、調査、紹介、
論説等(前年度や過去の業務報告、実践報告など実務担当者からの報告も歓迎)

応募資格:発表者は学会員。連名者は非学会員でも可
委員会が認めた場合発表者が非学会員でも可

申込期限:平成23年2月1日(火)

原稿提出:平成23年2月28日(月)

申込方法、原稿執筆要領、その他詳細は支部HP参照

<http://www.crc.or.jp/c-plan/>

編集後記

みなさま、本年も当支部のニューズレターをよろしくお
願い申し上げます。

今年のお正月は、どのように迎えられたでしょうか。

一年の計を立てられ、今年こそはと、新たな気持ちで良
いスタートを切られた方も居られるのではないのでしょうか。

中には、正月の風物詩となった箱根駅伝を見て、いろいろ
な思いを馳せた方も居られるようですが、第87回を迎
える今年のレースも様々なドラマを展開してくれました。

各チームのエースが競う「花の2区」では、1年生が区
間賞を取り、最も過酷と言われ、高低差834mを登る5区
では、注目の「山上りの神」が健在ぶりを発揮し、復路の
6区では、新たに「山下りの神」が誕生するかと思えば、
来年のシード権争いも熾烈な戦いで、ゴール寸前でコース
を間違えるハプニングありと、挙げれば切りがありません。

なぜ、単なる関東地区のローカル大会にすぎない箱根駅
伝が、全国大会よりも盛り上がるのでしょうか。

東京大手町から箱根の芦ノ湖畔までの往復200kmの区
間を時速20kmのスピードで、二日間かけて十人の選手が
襷をつなぐ、男子大学生にとって最も過酷なロードレース、
サバイバルレースといわれ、予想できない展開をみんなが
期待しているのも事実です。自分に任された区間を力を出
し切って走り終えた選手のみが、次へ襷をつなぐことが出
来るといふそのような襷をつなぐ責任の重大さを選手もチ
ームも観客もそしてメディアも強く認識しています。

次の相手に襷をつなぐまでに、どんな走りをしたのか、
どんなドラマを演じたのか、何を果たしてきたのか、地域
にとっても、企業にとっても、人から人へ何かを「つなぐ」
ことは、非常に重要な課題であり、テーマでもあります。

今年は、一人の親として、地域住民として、企業人とし
て、そして都市計画に携わるものとして、「つなぐ」という
ことをもう少し真剣に考える一年にしたいと思います。

最後に、豪雪による山陰地方の方々の日常生活への影響
が少しでも緩和されることをお祈り申し上げます。

次号の配信は、5月の予定です。ホットコーナーやコラ
ム、トピックスなど、学会員の皆様からの原稿をお待ちし
ております。何かございましたら、総務委員会事務局(藤
岡総務委員長 e-mail: cp-fujioka@chiikikb.co.jp)までご連絡
いただければ幸いです。

また、ご本人の了解が得られた講演会プレゼン資料につ
きましては、当支部HPに掲載させていただきますので、
ご参照ください。支部HP: <http://www.chiikikb.co.jp/c-plan/>
(文責:長谷山弘志)

編集委員:長谷山弘志(編集長)、石村壽浩、佐伯達郎
周藤浩司、高田禮榮、福馬晶子、宮迫勇次、
安永洋一郎、山下和也、吉原俊朗